

↓この下より大猪がとび出しここまで突いて来た。



望ましい 狩犬の 育て方

神奈川県
田宮 治

◎勝負をかける

何十年やっていても、めぐり来る猟期は格別なものである。だれもがその猟期に目いっぱい望みをかけ大志を抱くもので、「あれもしてみよう」・「これもやる」と、はてしない策をめぐらせて猟場に立つものである。

初猟があつて、終猟が来る。そのわずかな、2度ともどらない猟期の中で、「何が出来て」・「何がやれなかったか」・「満足」し・「納得出来」・「心残りはなかったか」等が問題になるうけれど、「大切な事」は、その「中身」であり「成果」である。

「遣り遂げた充実感が忘れられない感覚となつて、未長く心に残るものでありたい」。そんな意味でも今猟期は70歳と言う節目であり、長年連れ合つて来た百戦錬磨の「一軍犬群」も年を重ねて、入れ替えの年であつた。

ブル号・ダイ号・小太郎号・そして富士雄号・クマ号・アイ号までも私に「最高の猪猟」を置き土産に現役を去る事になってしまつた。替りに彼等が残してくれた子犬群を投稿の「望ましい猪犬の育

て方」の実践となつたのが正に今猟期であり、文字通りの「名犬への道」を登りつめ、頂点を目指す事になつたのである。人は幾つになつても勝負をかけなければならぬ時がある。何事においても「戦い」は、その根基をなして、戦う事で「相手を知り」・「己を知る」。そして「戦いに勝つ事」その重さを計り、「強さが生まれる」。勝負は勝つ為に「ここぞ」と思う時に「全力をかける」事である。

たかが「猪犬」ではあるが「作るのも」・「育てる事も」・「仕上げ」事であれ、人様は簡単に思っている様だが、本気で取り組んでみると、それはまさしく戦いであり、大猪と戦う前にまず越えなければならぬ大勝負なのである。猪人は戦いをくぐりぬける度に大きくなり強くなり人格も形成されると思うし、猪犬だって勝つ事で自信がつき、猪との攻防芸を極めてゆくのである。「これはすごいぞ!!」と見る人をうならせる「一級品」の「芸」とか「名犬」を肌で感じる「極芸」が出来上がる

までには、どんなに頑張つても、三秋はかかるし、若犬の訓練は、

そんな事からも「三秋を見る。」
と言われる由縁である。

当然の事であるが、子犬を「作
つて」・「育て」・「仕上げて」・「守
つて」来たからには、目指すは「名
犬」なのである。猪にかけたなら、「ど
うだ!!」・「これで何か文句あるか
!?」とうそぶける様な「猪犬」で
ある。

見事な一芸でどんな猪でも圧勝
する猪犬作りであるのだが、不思
議な事に自分で使つて「納得ゆく
様な一級品の猪犬」になると、そ
の「一芸」とか「名犬」は、他人
にも見てもらいたくなるもの
のである。そして他人様の
評価を得る事は、この上な
い喜びとなるもので、それ
によって「さらなる改良等」
の「かぎらない後押し」と
なるのである。

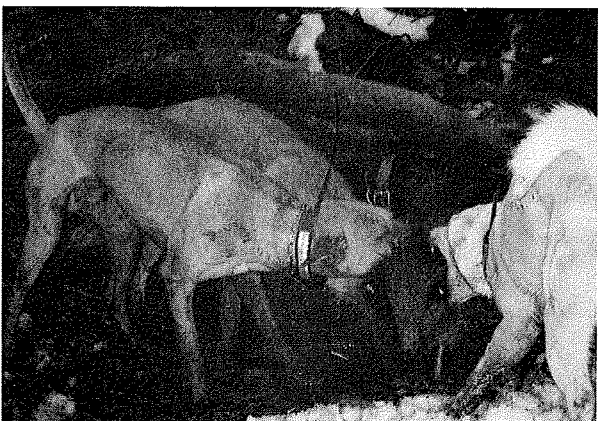
「猪犬の改良」も「猪獵
そのものの改善」も「他人
様の評価が一番大切」であ
る。そんな事から評価を持
ち帰り、またしても「しな
くても良かった」、さらなる
「奥技への挑戦」となるの
だが、こんな仕上げへの挑
戦は、楽しさを超えた戦い



山梨県の獵場から富士山をのぞむ。



咬み一番は頭に、2頭は足に、決して逃げない。



こんな小物は、一咬みで。
千葉での実戦（プル号、シロ号、マロ号）若犬。

そのものなのである。当然の事で、
戦うからには勝負をかけ続け必ず
勝つ心構えがなくてはならない。
「ライオンが鼠を捕える時でも本
気で立ち向う」と言われる様に、
「どんな小さな事」でも戦うから
には「勝つ事で成果を残すべき」
である。

何事に対しても、幾つになつて
もである。勝負をかけ、考え、戦
い続けて勝たなければ物事の完成
はない。基本的には「実戦を勝ち
とるまでには、その何倍もの実戦
さながらの訓練が必要」である。

これは、どんなスポーツでも全
く同じ事で、「練習」訓練こそ「勝
つ為の手段」であるし、「技術完
成の根源」である。当然の事で「訓
練」は、「苦しい」・「つらい」そ
んな事ばかりであるが頑張つて乗
り越えて、「楽しめる猪犬を勝ち
とつて」欲しいものである。

完成した猪犬を使つての実戦は、
作つた主人はもとより、見守る獵
人達にもこの上ない喜びを与える
ものである。「我が為にも」・「愛
犬のためにも」、せっかくなぐり
あつて「立つた獵道」である。極

限まで追う事でぜひ本物の「猪犬」
と「極上の喜び」をつかみとつて
欲しいものである。

◎真剣勝負 その1

その戦いは、正に「命を賭けた
大一番」であつた。この年まで大
猪とは幾度となく戦つて来たので
あるが、こんな攻防の体験はこれ
が初めてであり恐らく最後である
と思う出来事である。

今日は12月15日（土）快晴で、
またとない猪獵日和である。真逆

そんな「大一番」が待ち受けていようとは露知らずで、山梨県のいつもの猟場で猟仕度を整えていた。今日は「大物が出るぞ!!」・必ず「ヨシ号」と「マロ号」の「敵」を討つてやるからな」と猟友と元氣をつけ合う。ヨシ号とマロ号は、先週この大沢右峯を大猪と越えたり2日間も帰って来なかったのである。

寝屋でほんの少し鳴き込んだが、



この秋楽しみな4ヶ月の兄妹犬(4頭)。(先腹にヨシ号とキヨ号がいて見事に仕上がっている)

止めきれずに追ってゆき大山の裏沢あたりで戦っていたらしくヨシ号はほっぺと胸・足に大怪我をしていて、マーカーは壊れかけ、ベっとり血とドロドロのかたまり身体どろまみれで、猪の臭いがたちこめていた。

それでも残し置いた犬箱に戻って来ていてほっとしたのであるが、その傷がみな「咬み傷」であった事と「足跡」から残っているのは「牝猪の大物だ」と思っていたので、さらなる人念な準備である。

ひよつとしたら1年位前になるが本誌より「投稿依頼を受けて」出してある(まだ出してもらっていない)、「心に残る狩猟」で、くわしく書き残している我が家の「咬み一番犬・サクラ号」の「前足を折ってくれた」この辺では有名な「犬切りの大猪」であるかも知れない。

猟友は猪猟のベテランで100頭以上も実績を重ねている。たよりになるS氏と2人である。今日は、「まとめてめんどう見えてやるぞ!!」などと大口をたたき合いながら7時15分、車より全犬放しての入山となったので

ある。

雲一つなく、無風の山々は、静まり、若犬を仕込むにはこの上なく、どこまでも見通せる絶好の大沢である。木々の葉は落ち、それを蹴散らしながら犬群は小気味良く狩り進んでいる。若犬なるが故に、はりきりもあつてか、なかなかのスピードで、その動きも悪くない。

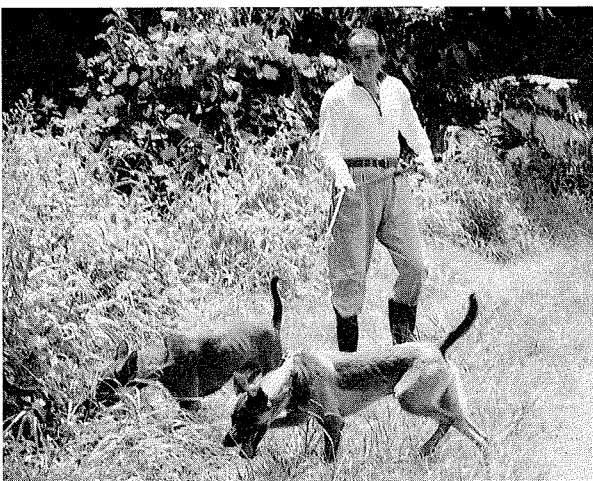
「すぐ出そうだね」・「そんな大物いるのかよ」・「猟友は犬群の動きで猪は出ると察している様であるが、猪跡がないのでほとんど大猪には疑いの心境の様だ。

犬群は2人の期待をみすかしている様に杉林の中を一団となつて狩り進んでいる。「何か臭う様だね」・「すぐ出るかも知れないよ」・と小声で5分位、小沢を登ったあたりで、急に犬群の動きがせわしくなり、左上に広がる雑木山に消えて行った。

「この上だね」・立ちどまって2人で対策を話していると、3分もたたないうちに鳴き出した。「よし出たぞ」。俺は「犬達による

から」・「と言ひ残し猟友はまるでサルのように、立っている崖を這い上がり小峯に立った。無線」・この峯伝いに犬達によるから後をたのむ」と姿が見えなくなった。

犬群は止めきれない様で小沢のつめあたりでさかんに吠えついているが、少しずつ上に移動している様だ。この山の頂上は1800m位で登山者も多く、有名な「昇仙峡」と背中合せになっている。山の頂上付近には「塩平」までスーパールン道が通っているが冬期間は車止めがあり、地元の猟人



毎日続く、つなびきの訓練。これなくして猪猟は語れない。

外は入れないところである。そんな訳でこの山を越されたら大変で、追う事など出来ないのである。「すごいところで、なかなかよれないよ」。「ひとまず大峯にのぼり、そこからおりる様に近づくよりない様だ」と言っているが、そのはずである。

「かつての一軍ならば、必ず私の前に落として来るところであり」、「きついで登った事のない山である」

「だんだん鳴きこみがするどくな

「つてはいるが、咬みには入れない様だ。「大猪かも知れない」」急に不安になり、獵友とは反対の小峯に登る事にし、その事を告げる。向うひらまで300m位はあるが撃ちこめない事ではない。

「きついで登った事のない山である」



もう猪にどんどん咬みこむ5ヶ月の兄妹犬、(左より武蔵・ブイ・カツ号と母親ナオ号) ナオ号は富士雄×チヒコ号で良い血を受けている。



5ヶ月でもこの通り、一直線に咬みに入り決して逃げない事が名犬へのポイント。(左よりブイ・カツ・千代・武蔵号兄妹4頭)

「まあ仕方ないね」。

「この山では咬みこんで落として来ない」と駄目だよ。

猪に犬がついている足跡が上に登っている。」との事である。

「このまま進めばまた猪に当りますよ。」「きつい山なのでゆっくり進みましようや」。また獵のはじまりの様に、4頭をひきつれ気ままな流し獵である。小峯の両側をのぞきこみながら一歩、また一歩、と待ち合せの頂上を目指したが、大汗で大変だ。



我が家の大切な「つる」である。牝3、牡1は岐阜の矢嶋様予約（グロースサイエンスにミルクとカンツメをませ、大切に育てる）。母親は奈智号（富士雄号×クマ子号）。

この年になると山梨の山はどこでもきつい。「人に頼まれたらお金をもらっても登るまいに」。と思いつつ、いつも休む大木に腰をかけ思いきり水をのむ、さてここからが急坂である。プロローグ（06・5連）右背よりタスキがけにし、ラック（上着）をぬぎ、リュックの上に背負う様にし、両手で胸をむすび、タオルを首に



まき木やつるをつかみながらやつとの事で大峯筋に出た。尾根筋は草木がきれいなぎたおされ、広い道が続いている。峯に出てほっとしたのか立ちどまり、タオルで汗をふいていると、いつの間に行つたのか反対側で「ゲン号」の「すごい鳴き声」である。おかしいなア。「何だろう!?」。今までに聞いた事のない鳴

もう一軍かおまけの芸で名犬への道を突き進んでいる。左ブル号二代目とヨシ号（1歳）

き声である。「ウーウーウーッ、ワン!!」「ウー、ウー、ワン、ワン」ものすごいうなり声である。「何だ。この鳴き声は!?」それはゲン号が猪に対するいつもの吠えこみではない。まるで他犬を前にしての「ケンカ」で「威嚇している」様である。そのすごさは今までにないもので地ひびき音とまじったドスのきいた鳴き声である。私はとっさに「ゲン、ゲン!!」「やめる!!」「来い!! 来い!!」と声のする方に近より「大声で呼びもどし」をかけた。

ゲン号はボサやぶで何も見えないうが、50m位下のたるみあたりでやり合っている様だが他の3頭の声はしない。さらに大声をほり上げ「ゲン、ゲン!!」「やめる」「来い!! 来い!!」。ととなり続けた。ゲン号はそれに返事でもする様に、「ウー、ウー、ワン、ワン」と吠えながら少しずつ登って近づいて来る様である。私はいつもこの上の林道から「紀州犬」を何頭も放し、下に狩り進んで来る。この辺では「悪名とどろくグループ」がいるのだがその紀州犬だと思つたのである。

かつて、私もこのグループからの「うわさ通りの仕打ちを受けた」事がある。それは「上から犬を放したから」「殺されたくなかつたら」「すぐ回収しろ!!」と言うものだった。先に来て山に入り、狩りすすんでいる中の事である。私の獵友、松土氏もかつてこのグループの犬群に「家でつないでいる犬」を「咬み殺された」事があるそうだが、はじめはその事を認めもしないグループである。

私も何回目かに「咬んで殺す方が問題だろう」。「今日は私が先に来てすでに犬を放して狩っている



いつもこの木に腰をおろし一休みする（流れる汗をぬぐって、ほっと一息つく安楽椅子。）

のだ。「お前達がひけ!!」と言ったら、それでは「あの峯の向う側を狩るから、あの峯を越さない様に」との事で話がついた。その後は何のもめ事もなかったが、それが丁度「この峯」なのである。私はてつきり「その紀州犬」とわたりあっていると思ったのである。そんな訳で、怒った調子で「ゲン!!」、

「来い!!」「来い!!」「来い!!」、である。

「地ひびきする様な、がさがさ音」がどンドン上がって来る。やぶの中からはじき出される様に「ジョウ号」と「富士美号」がとび出して来、私のそばに「逃げる様にすりよって来た」。その後から「ゲン」が「うなりながらとび出して来た」。「ゲン、来い!!」「ゲン、来い!!」と呼びながら何とか、この場から遠のこうと、先に立って15m位走ってよび続けた。

後をふり向くと、ゲン号は益々元気付いた様に一目散にひき返しヤブの中に吠えながらとびこんでいった。前よりすごい吠えこみである。「しまった」「ゲン号が危ない」。駆け寄って、「とび出して来た近くまで呼びもどる」と、またしてもゲ

ン号がはじきとばされる様にとび出して来た。背毛を逆立て私の所にも来ずヤブの中に向って吠え続けている。

突然巨大な物体がとび出た。「オッ……何だこれは?」何が起こったか咄嗟に判断つかない出来事であった。まるで「真黒な大岩」が「三つも」である。「熊か?」よく見ると何とそれは「大物の猪」で、真中に「130kg位」・「右・左に助さん格さん」よろしく「150kg」はありそうな「2頭をひきつれ」て、とび出たのだ。

猪撃ちが猪におどろいていたのでは、どうしようもない事であるが、真逆・こんな大猪が一度に3頭もこんな所でとび出そうとはだれが想像するであろうか。大声を張りあげとなり続けている私の前にである。「怖い」とか「恐ろしい」とか、そんな事を考えるひまもないし、まず猪だと思ふまでに、ほんの数秒だと思ふのだが頭の中が真っ白になつていた様でとつともなく長く感じた。ゲン号は山の様な3頭の大猪にもひるむ事なく、私を守る様にすぐ前に陣どり、ものすごい唸り声で攻めこんでいる。

今にも丸のみにしそうな大猪の鼻先に必死で咬みこんでは、とばされ、とびのいては吠えこむ、私を信じ、そばにいるだけなのにさらに力強くなり、一歩もひかない。このままでは「ゲン号がやられる」。「なんとかせんと……」。

やっと我れに返り銃をにぎろうと思つたのである。いつもなら銃をかついでいる時だつて、ヤマドリなどでも「とび出してからでも撃ちこめる」のに:「何と銃がとれない」のである。銃は左背からたすきがけであり、その同じ左背に「リュック」と「やっけ」の「そでがからんでいて」なかなか「背い皮」に手が入らないのである。「おちつけ」「何をあわてているのだ:」。その時である。大猪は首を地にすりつける様にして「グ・ォッ・グ・ォッ・グ・ォッ」と唸り声を張り上げ、地ひびきを立てて突進して来た。

ゲン号は、私のすぐ前までとびのいて来たが、ひるむどころか前に立ちはだかり、体をはって頑張っている。情け無いか、私はゲン号に助けられ「背い皮を探りながら」「一目散に逃げていた。」どこかに「木がないか」と前方を

見ると左手に大きな「樫ノ木」が目にとまった。「しめたぞ」とその大木の蔭に体をまるめながらとびこみ、やっと銃を右わきの下から抱く様にして構える事が出来た。「よし!!」と夢中で（安全を外

しながら）スコープを覗くとなんと全部が「大猪の鼻」である。そのつけ根に一瞬^{ツラ}がピタッと止まった。「このツ」^ツと叫びながらすかさず引き金をひく。「グオーツグオーツ」と奇声を上げ、くるっと向き

を変えて来た道を逃がれようとしている。

「くそ!! のがしてたまるか」と、

二の矢であるが^{クロス}が背骨に決った。狙っているひまな

どない。そのまま撃ちこむと「10cm位の背肉」がぶつ

とぶのが見えた。肉こそ損なわれるが、動物はこの部分も急所である。

ドドツと地びびきを立てさすがの大

物もその場にこげ、ぴくりともしなかつた。「よし、き

まり!!」欲張って追って来た「2頭の大猪は」と、木



単独猪猟犬は、この様に5〜6ヶ月に見せる、咬み込む姿と、咬むところが大切である。(咬んだら離さない、そしてまくられても逃げない。)

かげからとび出すが、もう大物の姿はどこにもなかった。

「やったぞ、ゲン」、「よしよしよく耐えたなア」・「何度も何度も抱きしめ」・「なでまわしていた」。

ゲン号はその手を払いのける様にまた大猪のふつとんだ肉のあたり

に咬みを入れていた。「どうだ、勝ったぞ!!」と言いたそうに勝ちほこり思いきり咬み

こんでいる。殺されかけたうつぶんをはらしている様にも見えた。改めて猪を撃った場所を見てびつ

くりした。大猪が倒れている所まで、「6m位」である。

いやはや驚きで、大猪はなんとゲン号と私を突いて来て、大木を

はさんで2〜3mまで追っていた事になる。「この樫ノ木がなかつたらどうなっていた事だろう」と

その木をなでまわしながら、その瞬間を思い出そうとするが、すぐ

直前の出来事なのに、「無意識の中」で「反射的に動いた様」で、

ところどころがぼやけ「夢の中にある出来事みたい」である。それにしても300m位までならば自信をもって撃ちこむはずでいつも

いつものまにか、「富士子号」と「ジヨウ号」、「武蔵号」が寄って来て、こわごわ猪を「なめたり」、「咬んだりしている」が、「恐ろしくて声も出ない。」

「これだけの大物になると」、「並みの猪犬」では咬み込めるはずもなく、「吠えこむのがやっと」である。小猪（60kg）なら、まあまあ

の芸をする様になっていたのに「声も出ない」のである。

それにつけても「ゲン号」はすごい。まさしく「おびきよせ芸」である。山の様な大猪相手にいつもの「咬み一番」では一発でかみ

殺されてしまう。事実「大猪」は「ゲン号」を、「裂き殺すつもりで追っかけて来た」のだ。いつの間にか、こんな「見

事な一芸」を使って見せてくれた。嬉しくて嬉しくて、舞い上っていた。この気持をS氏にと、やっと

シーバーに手をかけた。「とれますか・どうぞ!!」。かすかな声だが、元氣そうに「どうしました。」と返って来た。「とれました。」と告げると「本当かよ!」

と言うので、「大猪だよ。」と答えた。猟友は、ハヤト号が乗っている大猪の足跡をずーとつけながら

待ち合せの頂上を目指し登り続けていたとの事であるが、小峯が重なる崖下を横ぎっていてゲン号の声も、銃声も全く聞えなかつたらしく、不思議そうに「そこはどの辺かい。」と言う。

私は何と説明しようかと周りを



田宮系と名乗るからには、皆見分けがつかない程似ている。やつのける芸もはらつきやおちこほれがない。そして仲良しである。ブイ号（茶色のV字が顔にある）カツ号、母ナオ号。

見渡しながら「登って来る先に、高い三角の峯が見えるだろう。」

「ああ見えるよ、その頂上の下を「ハヤトと猪あとについて右に横ぎっている」。そうしたら「頂上から右に下ったあたりに松林が見えないか」。「見えるよ」。「大声を出して」との事である。

2〜3回大声を出すと、

「OK!!」「わかった」

「今、行くから」と元氣な返事である。

しばらくすると大汗でかけつけてくれた。

「おおすい」、「これは牝の大物だ」。さすがである、まだ私も確認していないのに「牝の大物」と言う。まずガツチリと握手、「よかった」、「よかった」…。

大物猟はこんな瞬間がたまらなく良い。心が通い合って「苦勞の花」が「バツと咲く時」である。どつかと腰をおろし、リュックの物を食べながら「大一番」の顛末を事こまかく話すと、この牝猪は「1

30kgはあるで」、「それが小さく見えるとなると「確かに150kgはあるよなア」。

それが3頭で突いて来たら大抵の者は驚くよ。俺も1000頭以上猪を獲っているが、こんな「牝猪は滅多にないよ」。「狩猟界に出すと、よし」。「よし」とは山梨県の方言である。全国でもきつと珍らしいはずである。

ちなみに後日知った事であるが、猟友が持ち帰り計ったら「137kgだった」との事である。

さらに驚いた事に、この大猪の体内より「6粒弾」が2粒出て来たそうである。こんな荒猪は、並みの犬では動かせないし、タツにはめる事も容易ではない。

当然の事、咬み止め等は困難を極め、吠え声も出ないものである。したがってゲン号がやり抜けた「おびきよせ芸」が一番理想で、怪我もなく、殺されないで見事撃ちとれるのは「この芸以外ない」と思うのである。

「写真をとってやる」、「そこにすわるとよし」。私が狩猟界に出す写真を楽しみにしている事も知っている、そんな猟友の気持ちもた

まらなく嬉しい。私はゲン号を抱きよせ、こうして「記念を残せる事を」しみじみと感謝し「猟友」と「愛犬達」に心の中で手を合わせていた。

愛犬達はまだ猪をうれしそうにいじりまくっている。なめて見たり、咬んだり：「食べても良いよ、今日は：」。

かつての一軍から見たらまだまだである。猪を決して逃さない「見事な谷落し」や「名犬クマ号」や「宝大ミス号」の「おびきよせ芸」や「迎え芸」、には遠く及ばないが「ゲン号」の「おびきよせ芸」には若犬らしい「荒っボさ」と「ス・ビード」そしてなによりも「迫力」があった。

とうとうここまで仕上がった「ゲン号」と「若犬達」を「精一杯ほめ」「なでまわし」「リュックのものを残らず与えた」。「お前達に助けられたなア」、「こわかったろうに」、「よくぞゲン号について頑張ったなア」。立派なものだ。

私は常々「愛犬の前で主人が逃げる様では駄目だ」とか、「すぐ近くでは銃を撃つな」、「ガンシヤイになるから」とか言ってきたし、心に決めている。今までに一度だ

って本気で逃げた事などはない。

ただそんな中でも「必ず立木のそばに身を寄せる。」事を心がけて来たのであるが、それは「木を盾に身を守る事」と「どんなに遠くても木に銃を添えて一発でしとめる為」である。咄嗟の時は、いつもやっている事が自然と出るものだとつくづく思い知らされた。

獵友は、「この距離でよくスコップに入ったね」。私もかつて付けていたが、「一瞬にこの距離から入るものでも撃ちこめるもので

もない。「さすがだね。」とお誉め頂いた。本心で言ってくれたと思うのだが、「これには照れた」。

あんなに長く必死で戦ったこの大勝負も、終つて見れば、ほんの瞬間であり、獵友と「無線のときれた間」の出来事である。運よく大猪をものにしたから良い様なものの、逃げられていたら、「あぶざまな逃げ」は猪獵人として「笑いにもならない。」

「成果主義」は良い事ばかりではないのだが、単独（2人位で）



たゞ大物だけでなく肉質も最高であった。(あまりの重さに、せめて、ハラを抜く事にした。)

で猪に立ち向うからには、自力で、全神経を集中させ最後まであきらめずに戦わなければならぬ。

そして「必ず勝つ事なのである」。そうすればその事実が当然の事、「犬芸を完成する事に繋が

り」、「獵技術も極めてゆく」事なのである。「ゲン号」も「チビ共」も、これを契機にきつと見違える様に成長すると思う。「ニコニコ」で話しているうちに大汗もひき、

さてここからが「地獄の引き出し」となるのだが、それもこれも獲れたうれしさが後押ししてくれる事であり、みな「思い出に残る」「楽しい苦労である」。撃ちとつたのが9時頃だったのになんと7時間にも及ぶ「大猪引き」であった。

途中で何回も休み、大の字に寝転び元気を取り戻し、また引き出す。それもこれも「好きでない」と「やっつけられない事」である。

悪戦苦闘の末、それでも日のあ

て「命をかけた真剣勝負」は「いつまでも心に残る大一番」として私の獵人生に生き続けてゆく事だと思ふ。ただ「ゲン号」からすればあんなに「大猪だ!!」「それも3頭だぞ!!」と知らせたのに「やれ、鳴きがどうの」とか「ケンカ

等決してしないのに」、「紀州犬とやり合っている」と早合点、「迎えにまで行つた」のに「氣付いてもくれなかった」。大猪で手におえないので大声で吠えさせているのに「信じて」せめて「相手」は「撃てる物」だと察して、「銃でも

構えてくれていれば!!」、あんなぶざまなオヤジの逃げなど見なくてすんだはずだし、俺が体を張つて、咬みを入れてる間に「3頭とも撃てたはずだよ」。「もつと信用せんと」。「自分の相棒なのだから」と言いたかった様に思えてならない。

こんな事(ゲン号の思い)が私の偽りない反省であるが、常に満点を望むよりは、どんな状況の中でも困難を克服、奇跡までも味方につけて「戦いは」「必ず勝つ事だ。」と思ふのである。たかが猪獵、されど猪獵、その立役者である猪



大一番を契機にどんどん登りつめていく。期待のゲン号。ゲン号の止め鳴きも覚えたし、その後も大物がいれば必ず獲れている。

犬を仕上げて登りつめて行くに当っては、「実戦の場で」「勝つ事」を「積み重ねる事」で「若犬に自信を付けさせ」もって「天性の猟能」を「磨き出し」とっておきの「一芸」を「完成させる事」である。基本的に勝負は強い者が勝つのであるが、こと猪猟に措いては、「安全」で「安心」が第一条件となるので、強いだけでは「納得の勝ち」は無いのである。全ての点で勝つ為には常日頃、この辺に注意し、くり返しくり返し「この道」で「生き残れる」、「秘芸」と「勝

つ体験」を重ねる事が重要である。真剣勝負の実戦では猪犬も獵人も「待ったなし」であり、訓練でつちかわれた本物の実力だけが頼りであり、物を言うのである。実戦の場では、どんな言い訳も押し挟む余地など全くない世界なのである。

正に突きつけられる現実、苦戦であり、恐いもので、荒猪は若犬であろうと老犬であろうと手加減などする訳もない。

ただそこにあるのは「生か死」であり「命を賭けた戦い」なので

ある。どんな立派な「猪猟論議」を学ぶよりは、この様な「過酷な実戦」の中から「勝つ事を覚え」、「生き抜く法」を積み出してゆく。

こんな「体験学習」こそが「登りつめ」、「頂点を目指す若犬」として、一番大切な事なのである。何度も言う様だが「この道」を極める上で「成否を決める重要な事」は、犬群のボスである「主人の心構え」である。「どんな激戦でも必ず勝って自分達のものにする」。「それでも、俺達は勝つのだ」と言う「不屈の信念」を持ち続ける事である。

そうすれば若犬達も「激戦を制する事」で「さらなる激戦をも戦い抜き」、ついには、「どんな大一番」でも見事に決められる様に成長するのである。あくまでも、その若犬に合った方法でくり返しくり返し、「命を守る、必殺の一芸」や、その子より出来ない「秘芸」を身をもって完成させる事なのである。

激戦をくり抜ける度にそれを契機に若犬達は、その中から「何かを掴み取り」・「身を守る武器」とするのである。

思えば幾度となく夢をかけ、登り続けて来た「猪犬作りの道」で

あるが、計らずも70歳の挑戦となつた。信じて育てた子犬達であつて見れば当然の事かも知れないが思った以上に頑張ってくれ、やつとの事、7合目位まで来た様である。残すは、急坂・難所続きの「胸突き八丁」である。

「今までにない芸域」に「どんどん分け入り」めきめきと、力をつけているので頂点に立つのもそう遠くないものと思う。次回はその辺の事を実戦を通してお知らせ出来れば、と思つていきます。

「真実」を「手順を追って述べている」つもりであるが、「拙い迷文につき」御理解頂ければ幸いである。投稿に当たっては、私の「猪猟」と「猪犬達の芸」等を通じて全国猪猟人の方々に何かやる上で、良いきっかけになれたり、参考になればとても嬉しいと思つているところである。

本誌は、良い文章が多い様でなかなか出してもらえないが、毎日の様にかかつて来る全国猪猟人の皆様のありがたい激励にはげまされ後押しされて「好きな犬」と「猪猟」を書いておきます。ありがとうございます。